広報 留萌 1990 10 No.391

特集 留萌市高齢化社会対策推進計画

# ◆連載 いま留萌むかし 第四十六話

## ●留萌神社

留萌で一番古くから信仰を集めてきたものに留萌神社がある。この神社は本来厳島神社として崇拝されてきた。その開基は天明六年（一七八六）、海上安全、漁業祈願のために当時のルルモッペ場所支配人栖原彦右衛門が安芸（広島県）の厳島神社の分霊を勧請したことにはじまる。祭神は市杵島姫命（いちきしまひめみこと）で天照大神（あまてらすおおみかみ）の娘の一人である。

安芸の厳島神社は古くから信仰を集めてきたが、源平時代に平氏一族の崇拝を集め、平清盛が一二二四年に社殿を造営し、これ以降多くの人々の崇拝を集めるようになった。満潮になると社殿と鳥居が海につかり、あたかも海上に建てられた建物を想起させることで有名である。

創建の天明六年は栖原角兵衛が村山伝兵衛の後をついでルルモッペ場所を請負った年であり、これ以後栖原家の留萌支配が確立するのである。同じ年に同じく栖原が請け負った苫前場所、天塩場所にも厳島神社を創建している。ルルモッペ場所では礼受の厳島神社、鬼鹿の厳島神社が同年、同一人物による創建である。

またこの厳島神社は民間には航海安全の神として知られており、弁財天の社として全国各地に祭られている。本来は厳島神社と弁財天はかかわりがないのだが、民間では混同されていることが多い。ただ弁財天も水に関係ある神であることから民間で結び付いたらしい。そのため北前航路が蝦夷地に延びて和人が船でやってくるようになり、場所請負制で各地に場所が開かれると弁財天の社が各地にできるようになった。

留萌の弁天社については、文化3年（一八〇六）の「遠山日記」に

―運上屋北向座敷通り皆北向キニ建タリ。蔵ニ長屋アリ。辨天社ハ栖原屋ノ守神川向ニ在リ。華表（とりい）、石燈籠アリ。稲荷社平山原ニアリ。普請作事見事也。―

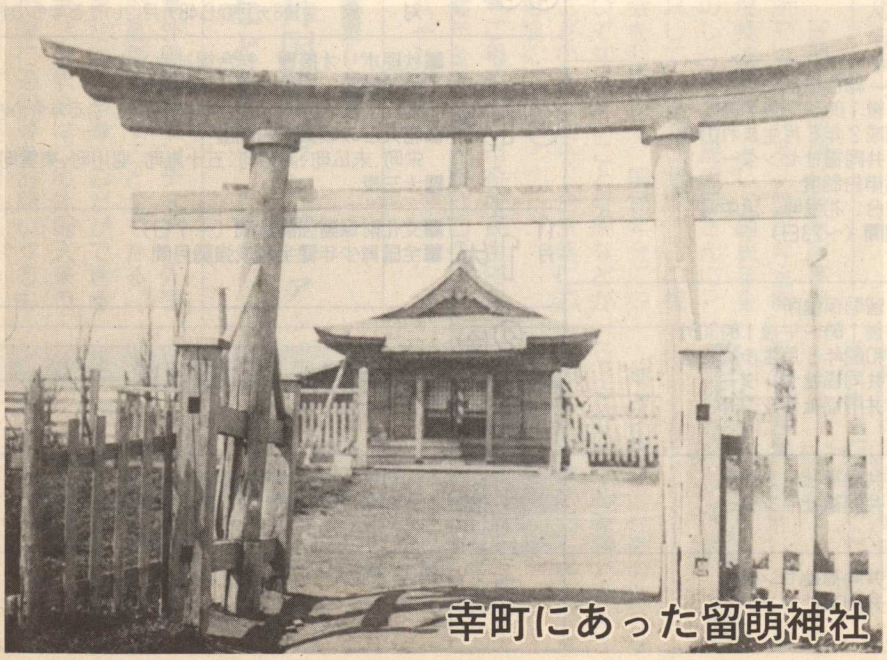
また、弘化三年（一八四六）の「再航蝦夷日誌」には

―辨天社川向ニ立タリ、華表（とりい）、石燈籠有、稲荷社同上ナル平山原ニ建タリ。普請非常見事也。―とある。

当時は見事な社がルルモッペ場所を見守っていたことであろう。

その後明治にはいり新政府の神仏分離令により弁天社から正式名称の厳島神社を名乗るように申し渡され、以後厳島神社を名乗るようになった。そして明治九年に村社厳島神社となり、後、郷社厳島神社をへて、昭和十五年縣社留萌神社と改められて今日にいたっている。社殿の位置も留萌川の河口にあったものが幸町の市役所横に移り、現在地に再度移っている。

名称社殿の位置等多くの変遷を経てきた留萌神社ではあるが、二一四年の長きに渡って留萌の移り変わりを見てきたことに変わりはない。これからの留萌の変遷も留萌神社の神様は見つづけて行くことであろう。



幸町にあった留萌神社

平成2年10月／発行・留萌市
編集・企画 振興室
印刷・白鷗印刷株式会社